終戦そしてその前後

鈴木治雄（前原東・65歳）

小学校に入った昭和六年に満州事変勃発、中学校に入学した昭和一二年七月日中戦争始まる。

中学五年の昭和十六年一二月八日太平洋戦争に突入、同一八年大学予科の時明治神宮野球場で学徒出陣を見送る。雨の降る寒い日であった。

同一九年には徴兵検査が一年繰上がって一九才からとなり、同年夏徴兵検査を受け第一乙種合格、だが、一年で将校になれるという特別甲種幹部候補生を志願して合格。

同二〇年一月一〇日久留米第二陸軍予備士官学校に入学、昼夜を分たぬ猛訓練と教育も繰上げられて八月一一日教育課程終了、あとは九月一五日の卒業を待つ間、補習や現地自活（農作業）を実施中八月一五日の終戦となった。それも牟田口練兵場で現地自活実施中のため玉音放送なるものは聞かなかった。

『学校に戻れ』との伝令によって戻ったのは午後二時に近かった。残暑の空に雲はなく快晴、飛行機も飛ばず学校は何か気が抜けた様に静かな雰囲気であった。そこで初めて日本が降伏したらしい、ということを聞いた。

「あー助かった」というのが実感であったが、この事を口に出して云える雰囲気ではなかった。

想えば始めに述べたように私共は小学校に入った時から終戦の日まで一日として銃火の絶えた日のない時代を生きてきたのだと思う。今と違って極端に情報管理されて、非常時だといわれ、神国日本、忠君愛国を教えられ、八紘一宇の精神を説かれ、必勝の信念を叩き込まれ、銃声砲火に明け暮れた異常な毎日の連続であったと今にして想うのである。

終戦の日から二日目の夕方だったと思うが、地方の人が軍隊を襲撃して物資を奪いに来るという情報が入り、警戒のため我々は各人二〇発の実包を渡され学校の周囲に配置された。『来たらどうしようか』、「同じ日本人だから射つわけにはゆかんから、その上の方目がけて射つか」等と話し合ったことがあった。勿論、これはデマだった。

そのまま一カ月ほど学校に居て九月一五日に復員する時、曹長の一等級二カ年分ということで千四百円程を貰った。生まれて初めての大金で東京に出ても三年位は暮らせると思って一〇月の末、やっと宿舎も見つけたので窓ガラスの破れた満員列車にのって上京した。

途中、広島駅はホームの屋根も駅舎もなく駅前の三階建てのビルは一階建程に潰れ原爆の物凄さを語っていた。その後通過の主な駅とその市街はすべて焼野ケ原で、やっと東京駅に着きホームから見渡しても焼野ケ原で本当に負けたと実感した。

物の無い異常なインフレの中、あの千四百円は二〜三カ月で無くなって

しまって、今度は自分が生きるための本当の戦いが始まった。価値観の逆転の中、解禁となった（新聞紙を折った様な）共産党宣言なる本を読んでこんな考え方もあったのかと感銘を受け、それからは物事を一つだけで見ない様に心掛けるようになった。

今度は学業は必要最小限（？）にして生きるためにアルバイトに精を出した。芝浦で進駐軍の用役、建築現場の夜警等腹が空くので進駐軍の残飯にありついたこともあった。

練炭造り、原料が無くなると工場床の黒い部分をスコップで削りとって、之で練炭なるものを造り（火が着くかどうか心配だったが）、工場のある三宿辺りから高輪まで大八車で運んだが、流石の輜重兵も三日目には食物がなくてダウン、やっと戻って社長なる人に退職を申し出たら、慰留されうちの社員にならんかと迄いわれたが、そんな先のことより今日の銭の方が優先して断り、三日分の給料を貰って引下がった。

卒業が近づくとそうアルバイトばかりやっても居れず、卒業試験の準備にかかる。働かないので当然金が無くなる。手持の本や何がしかの衣類を売っても知れたもの二日間食べられない日もあった。今思っても大変苦しい日々だった。

卒業式が入社試験と重なったので勿論後者をえらび入社試験に臨んだ。採用予定の電報が来た時は本当に嬉しかった。もうアルバイトなんかせずに仕事さえすれば金が入ってくるのだから。

幸い二十三年鉄鋼会社に入ることができて以来四十一年、入社式の『日本復興のもととなる基礎産業……』の訓示を戴してひたすら働いてきて、日本が今日此の様な立派な国になったのも、我々の一臂の力をも与っていることを些かの誇りとして今年から年金生活に入っている。

これからは自分を大切にして残りの人生を自分に忠実に生きてゆきたいと思っている。

それにしても昭和三〇年に結婚して社宅を貰い、日曜日等二人で静かなつましい食事をしていた時に、平和とは本当に有難いものだと思った。私共にはもう召集令状が来る心配もないが、我々より年長の人達には食事をしている時でも召集令状がきて生木を裂かれるように別れなければならなかったし、戦時中はいつ何時令状が来るかという状況下での生活は大変なものだったろうと思う。

想えば私の軍隊生活は戦争末期のせいか、ちぐはぐな事が多かった様な気がする。

私の入った予備士官学校は輜重兵科（今の輸送部隊）であった。空には米軍のB29爆撃機が飛んでいるご時世だから勿論自動車輜重と思っていたら輓馬輜重だったのでガッカリした。

馬は蹴るものと思っていたら、むしろ咬みつく方が多い様だった。馬は利口な動物といっても所詮畜生である。馬房は馬の食堂兼住居兼寝床兼大小便所で折角寝藁を乾燥させて気持ち良くさせてやったつもりだが、何故か入って来るとすぐ小便をする癖があり（人間にとってはまことに情ない話で）人間が乾かして馬が濡らす、これの繰り返しの毎日であったが馬はこれで安心する様だった。

牛飲馬食という言葉があるが馬には一日五回食べさせていた。妙に納得できた言葉であった。

普段ここの馬は余り運動もせず厩舎に居るから外に出すと元気すぎて困ることもあった。通信筒吊上げ訓練の時など飛行機が爆音立てて我々に近づいてくると馬はビックリして逃げ出すし、戦車を見ると暴れだすし、馬

事提要には〝動カヌ動クモノニ驚ク……〟とあったが実際はそれ以上だった。

馬の訓練は三三式輜重駄馬具、三八式輜重輓馬具、三九式輜重車等で行はれたが夫々明治三三年、三八年、三九年制定のものである。約四〇年前のものであった。一方敵米英はすでに軍隊の輓駄馬はなく、自動車になっていたのに。

昭和二〇年の初期は空襲警報が出ると、各人に小銃の実弾五発を呉れるのには面喰った。当時は敵機はB29爆撃機は八千米の高空を飛んでくるのに何で小銃弾かと思った。この小銃ではせいぜい五百米しかとばないので、B29にはとても届くものでなかったのに。おまけに警報解除になると此の小銃弾は返納せねばならず、員数確認がうるさいだけに後が大変だった。その分だけ眠る時間が減るわけだから。

しかし二〇年六月沖縄が米軍の手に落ちると小型機（戦闘機のP36やP38）が低空から機銃掃射や爆弾投下をする様になり、昼間は動けない様な状況だった。こうなると小銃でも対抗できるのだが、『危ないから』ということで実弾はくれなくなった。軍隊の建前としては一寸おかしいと思うのだが、警報解除後はすぐに眠れる様になったのは有難かった。

我々には九九式短小銃というものを持たされていたが、三八式小銃の口径を大きくしただけで改良されたとは、とてもいえるものではなかった。九六式小銃に較べても照星保護座、脚、棚杖、遊底覆いもなく木部に至ってはラワンであった。実弾射撃のときは他人の銃を借りなければ出来ない者もいた。新しくても撃針が折れていたのだ。

九六式軽機関銃も古いのはいいが新しいのは仕上げもお粗末なため活塞が動かず、初弾は出るが後が続かないものがあった。

日本の工業力が低下していることを軍隊の末端に居る我々に教えているようなもので、これで戦うのかと思うと情けなかった。

更に精神主義のことだが戦う物資が欠乏してくると『必勝の信念』ということが説かれた。これは上の者にとっては都合の好い言葉で、下の者が出来なかったら『必勝の信念』が足りん、と怒鳴れば良いのだから。上の者がなすべき事をしてそれで怒鳴るのなら解るのだが、四〇年前の兵器で馬で戦はせたのだから無惨である。

それにしても人間は自分の意志の表現や、行動ができるが、それができない馬、特に軍馬は気の毒である。

馬との縁ができて、日本在来馬の研究を始めて次の様な事が解ってきた。

日露戦争を契機として洋馬の輸入混血による改善（人間が目的とする）で在来馬は殆ど姿を消し、新らしく生まれた馬の大半は軍馬となって今次大戦には大陸に、そして南方に渡った。その数は六〇万頭を下らないといわれる。之等軍馬は一頭も帰還していないのだ。

哀れである。馬は何も語らない。

両彼岸とお盆には靖国神社に参りすることにしている。境内の遊就館正面に軍馬の碑があり、これにもお参りしているが私共が扱った輜重の輓馬や駄馬はあの様な格好の良い馬でなく、頭を下げ足も大きく何となく鈍重な感じのする馬だった。

これら軍馬の冥福を祈るや切なるものがある。

軍馬ひとつ還ることなし終戦忌　　素好

以前、国連の発表として、第二次大戦後三十七年を経過したが、その間七十五の国が戦火を交え千四百万の人命が失はれた。日本は戦火を交えなかった数少ない主要国の一つである。というのを覚えている。

すでに戦後四十四年、本当に日本は平和であった。昭和二〇年迄の日本を経験し、戦後海外出張の折諸外国も見て来ただけに、日本は本当に良い国だと思う。

今の若い人が平和に溺れることなく、平和のよって来たる所以を自覚して、更に平成の年代を平和なものにしていただきたいと思う。

以上

